

がん - 癌 -

だい ちょう

大腸がんについて

大腸の粘膜から発生する悪性腫瘍

大腸は小腸に近い所から盲腸、上行結腸、横行結腸、下行結腸、S状結腸、直腸と呼ばれています。

大腸がんとは、大腸の粘膜から発生した悪性腫瘍です。直腸、S状結腸に最も多く発生し、初期症状の代表的なものは血便です。従来欧米に多いがんでしたが、食生活の欧米化による、食物繊維の摂取不足と動物性脂肪の摂取増加によって、最近わが国で増加しています。便秘の人は、硬い便の滞留時間が長いため、腸壁を傷つける機会が増し、直腸やS状結腸に大腸がんが多く発生すると考えられています。

大腸の壁は内側から外側にかけて粘膜固有層、粘膜下層、固有筋層、漿膜（しょうまく）下層、漿膜と何層にもなっており、大腸がんは内側の粘膜固有層から発生し、発育とともに粘膜下層、固有筋層、漿膜下層、漿膜とその深さを増していきます。

早期発見・治療が大切

転移の仕方には、血行性転移（血液の流れに乗ってがん細胞が大腸と離れた臓器に運ばれ、そこで生着する）、リンパ行性転移（大腸の近くのリンパ節から次々に遠くのリンパ節にがんが入っていき生着）、播種性転移（大腸の壁の外側にがんが露出し、腹膜にがん細胞がバラバラとこぼれて生着）の3通りがあり、深さを増すごとに転移の頻度が増し、治療後の生存率が下がっていきます。

大腸がんは早期発見し治療すれば、ほとんど確実に治すことができるがんです。年1回は便潜血反応検査を受け、陽性の時は内視鏡検査を受けることが推奨されています。

大腸がんの治療法

大腸がんの治療法には、切除術、抗がん剤治療、放射線治療があり、がんの深達度（大腸の壁における深さ）、進行度（深達度、リンパ節転移、血行性転移、腹膜転移の状況によって決められるがんの進み具合）、大腸における発生部位、年齢、健康状態などで各々最適な治療法が選択されます。

切除術には、従来の開腹手術以外にも、腹腔鏡下手術（お腹の中を観察する内視鏡を用いて、従来よりも小さな創で行う手術）、内視鏡的手術（大腸の中を観察する内視鏡を用いて、お腹を全く切らずに行う手術：EMRやESD）があり、各々のがんの状態によって最適な切除法を選択します。

